

ふじさき歯科 デンタルニュース

2007年 No.15



「大名の行き倒れ」

という言葉があります。どういう意味かというと、大名のお殿様を診る医師は責任が重大であり、治療の結果が悪くなった時、極端な場合は腹を切らざるをえない、というような事があったそうです。以来、大名が病気になる、どの医師も結果をこわがって尻込みし、本気で診察をする者がいなくなってしまう。その結果、殿様ともあろうお方が名医はおろか、ちやんとした看病さえも受けられず、行き倒れのように亡くなってしまいう事がある、という事をたとえた言葉です。

このたとえにはあてはまらないかもしれませんが、医療には次のような二つの事実があります。一つは「医療を行う者は患者に対し最善をつくす事にやぶさかでないが、しかしながら常に最良の結果を約束できるものではない」という事。もし医療現場に「絶対」という言葉をいれなければならなくなったら、名医でも尻込みしてしまうでしょう。「私はどんな病気でも絶対に治せる」なんて言う医者がいたら、ちよつと信用できません。歯科医の私がこんな事言うて頼りなく思ふかもしれませんが・・・。話は少しそれますが、昔、ある医大（東大だったと思います）の

高名な内科医が退官する時の記者会見で「私の誤診率は三十数パーセントでした」と発言しました。その時会場ではこれを聞いて「ウォー」という一種のどよめきがありました。あとでわかったのですが、このどよめきには二種類あったそうです。一つは記者達の「そんなに間違っていたのか」というもの。もう一つは医師達の間で「それ位しか誤診がなかったのか」という感心したどよめき。今は検査法も発達しているのもっと率は良いと思います。とにか、絶対という言葉にはなかなか近よる事はできません。

それともう一つの事実。病気や怪我などを治すのは、根本的にはその人自身の体力、治そうという気持ちというなれば「生きる力」である、ということ。医療はその生きる力を手助けし、お手伝いするに過ぎないということ。病気が治つてゆく過程、怪我の治癒してゆくメカニズムなど神秘的と思われる位にヒトの身体は良くできていると感ずることがあります。これらの治癒力に対し医療はほんのちよつとお手伝いできているだけなのです。

「医療の行き倒れ」

さて現状の、そしてこれからの日本の医療体制に目を向けてみると、なにかすぐく混乱してお寒いこと

になつてきている気がします。世界の経済大国というのに大事な医療費のさまざまな切り捨て。医療のちぐはぐな需給問題（今、一番大事と思われる産婦人科医、小児科医がどんどん少なくなっているそうです）。専門家でもその主旨がわからなくなつてきている保険医療制度のルール。等々。

日本はすばらしい国民皆保険制度の国であったのが、その制度運用を間違え、制度に疲労を起し、血がかよわないものになりはじめているのではないのでしょうか？

歯科医療でも昨年から大変な医療費の削減、適用の規制を受け、歯科医院の閉鎖がでてきております。又入れ歯や、冠を製作する歯科技工士達もやめてしまう人が少なくなく、技工士学校の入学希望者は以前の半数以下となつてしまいました。（一人前の技工士になるには十年位かかります）。いったい十年後にはどんな歯科事情になつていくのでしょうか。

マスコミもそろそろスキャンダラスなワイドショー的な医療現場をとりあげるだけではなく、真面目な医療を行っている現場の医療体制に、どんな困難が、問題があるのかなどに焦点をあててほしいと思います。いかがなものでしょうか・・・。

院長 歯学博士 藤崎真人